

# 鳥霊信仰の地域的展開と幼児葬法

吉成 直樹

(人文学部人文学科人間科学コース)

## Religious Belief in the Birds and the Infant Funeral

Naoki YOSHINARI

### 目次

はじめに

I. 資料の概要－鳥翼の習俗

II. 鳥霊信仰の系譜

III. 死者儀礼と天鳥船－「灰膳」の習俗

結び

はじめに

幼児が死亡した場合、埋葬したのち、その上に目印になる石を置くなどするだけで年忌など一切行わず、きわめて簡略に済ませるのが日本に広くみられる一般的な葬法であった。高知県もその例外ではないが、興味を引くのは、幼くして死んだ子供のことを「鳥翼（トリツバサ）」、あるいはそうした子供を簡単な葬法に付すことを「鳥翼にする」など、鳥に関連づけて表現していることである。こうした事例は、これまで調査を行った限りでも、物部村、南国市、土佐山村、春野町、伊野町、日高村に存在していることを確認しており、より精細な調査を行えば、分布域の拡大する可能性がある。

本稿の目的は、特殊葬法である幼児葬法や死んだ子供を、なぜ鳥に関連づけて表現するのかという問題に対して、解決のための見通しを与えることである。議論の過程で、恐らくは、弥生時代以降持続してきた鳥霊信仰とのかかわりが示唆されることになろう。

### I. 資料の概要－鳥翼の習俗

#### (1) 資料の提示

以下で展開される議論の前提として、いささか繁雑になるが、これまで採集した若干の資料を掲げておくことにしたい。資料は、高知県の東から西へと配列する。

①物部村別府 (M43.m<sup>1)</sup>) …生後間もなく死ぬと鳥のようなもんじゃと言って簡単に葬式を済ませた。生後とは、出生届けを出す以前のこと。(881006<sup>2)</sup>)

②物部村別役 (T11.f) …1才まで死んだ子供は、鳥を飛ばしたようなものと言って、供養はしなかった。

(881006)

- ③物部村宮の瀬 (S3.f) ・2~3才まで死んだ子供は鳥翼と言って、葬式は簡単に済ませ、供養もしなかった。(871121)
- ④物部村押谷 (M36.m) ・幼児の死を鳥が飛んだという。(871121)
- ⑤物部村阿野地 (S2.f) ・幼児の死を鳥を飛ばしたようなものと言う。(871121)
- ⑥南国市久枝 (? .m) ・生まれてすぐに死んだ子を鳥にとらすという。(881013)
- ⑦土佐山村土佐山 (M34.f) ・生まれる時や生まれてすぐ死んだら鳥であると言って埋め、おまつりをしない。(871218)
- ⑧春野町西畑 (T7.f) ・生後1年以内に死んだ子は鳥翼にする、鳥に飛ばすという。葬式も本格的にせず、まつりもしない。実際、生後65日目と105日目に死んだふたりの子供を鳥翼にした経験がある。105日目に死んだ子供は、引き潮に生まれ、原因がわからないまま死んだ。太夫<sup>9)</sup>にみてもらったところ、「辻風、七人ミサキ<sup>9)</sup>に行きおうた」と言った。(871111)
- ⑨春野町西畑 (T1.m) ・間引くとき、生まれたらすぐに首を絞める。泣かなかつたら鳥翼になる。泣いたら人間になるので首を絞めることはできない。鳥翼にしたら一人前に取り扱わず、まつりなどしない。これはひいばあさんの時代のころの話。(871111)
- ⑩伊野町成山本村 (T3.f) ・月足らずでミテタ (死んだ) ら、鳥翼で返す。以後、おまつりはしない。臨月にできて死んだ子は名付けて埋める。名付け以前に死んだ子を鳥のようなものという。(871028)
- ⑪伊野町成山本村 (T2.m) ・名付け以前に死んだ子は鳥翼にする。その子供を鳥のようなものという。以後、おまつりしなくても良いという。名を付けたら、10日でもこの世の空気を吸ったら年忌はする。(871028)
- ⑫伊野町小野 (M40.f) ・生後1週間以内に死んだら鳥翼同様という。墓に埋め、以後おまつりはしない。(871028)
- ⑬日高村岩目地 (M41.f&M44.f) ・生まれてすぐ (半年より短いくらい) に死んだ子を鳥翼と言った。その子の葬式は簡単にすませた。(881011)
- ⑭日高村加茂 (M40.f) ・生まれてすぐに死んだ子供と鳥翼といった。葬式は簡単にして、あまりきちんとやらないほうが良い。(890301)

## (2) 資料の概要

幼児期に死んだ子供に関連して、鳥にかかわる表現を用いる局面をあえて分類すれば、i) 死んだ子供自身、ii) 死んだ子供を葬むこと、iii) 子供が死んだという状況、の三つに分類することができよう。微妙な事例も存在するが、便宜的に分類すれば以下ようになる。(括弧内は事例番号を示す)

### i) 死んだ子供自身

- ・「鳥のようなもの」(①、⑩、⑪)
- ・「鳥翼」(③、⑩、⑬、⑭)
- ・「鳥」(⑧)
- ・「鳥翼同様」(⑫)

### ii) 死んだ子供を葬ること

- ・「鳥翼にする」(⑨、⑪)
- ・「鳥に飛ばす」(⑨)
- ・「鳥翼で返す」(⑩)

### iii) 子供が死んだという状況

- ・「鳥を飛ばしたようなもの」(②、⑤)
- ・「鳥が飛んだ」(⑥)
- ・「鳥にとらす」(⑥)

事例⑩と⑪を見る限り、幼児期に死んだ子供を葬むことを「鳥翼」、死んだ子供自身を「鳥」または「鳥のようなもの」と区別して表現しており、あるいは両者に表現の違いをもたせるのが本来の用法であったのかも知れない。

また、鳥にかかわる表現を用いるのはいつまでかという点ではさまざまである。「生まれてすぐに死んだ場合」、「幼児が死んだ場合」など、時期の曖昧な事例を除けば、生後3日目あるいは7日目の儀礼である名付けを節目とし、それ以前としている事例が多い（出生届けとする事例①、生後1週間とする事例⑫も含む）。名付けの持つ意味を考えれば、この世に個性ある存在として確定する以前、換言すれば、「社会的存在」として認知される以前に死んだ場合に鳥にかかわる表現を用いる事例であると言える。ただし、生後次々に行われる一連の誕生儀礼には、子供を社会的に認知してもらおうという意図が多少ともこめられており、この名付けの場合に限ったことではない。そうした儀礼を繰り返すことによって、徐々に、社会に定着させようとするのである。

たとえば、物部村別役（事例②）、春野町西畑（事例⑧）では生後1年という時期を目安としているが、生後1年目の誕生日には「初誕生」と呼ばれる儀礼が高知県に限らず広く行われている。

⑩吾北村新別（T9.f）・子供にお餅とお財布を風呂敷に包んでたすきがけにして負わせ、箕のなかに入れる。

子供が泣くまで負わせておく。（881005）

⑪物部村大柄（M40.f）・餅1升と米1升をうわざし<sup>9)</sup>に入れ、風呂敷に包んで背負わせる。子供を箕のなかに入れ、そこから神前にいる母方の祖母のところまで這わせる。子供が泣かない時は泣かせる。神前では、子供の前に扇、筆、そろばんを置き、子供に取らせ将来を占う。（950113）

満1才を迎えた子供を箕のなかに入れ、1升の米でついた餅などを風呂敷に包んでたすきがけにして背負わせるが、このとき子供が泣くと良いと言い、泣かなければわざと泣かせるという。このとき子供を箕に入れるのは、生後、肉体として誕生したものの、まだ不安定で危険であった状態を脱し、無事、「実りある」確固たる存在となったことを象徴し、その時に、わざと泣かせるのは、新たな存在になったことを社会的に認知させるための「産声」を意味するのである<sup>9)</sup>。春野町西畑（事例⑧）で、子供を間引く際に、産声を上げたら鳥翼にできないというのも、実際の産声が、子供の誕生を社会的に認知させるものであるからにほかならない。産声を上げる前であれば社会的に認知されておらず、言ってみれば、社会的に存在しないことと同じなのである。

産声のアナロジーでその存在を認知させるという要素を含む儀礼はそのほかにもあり、生後33日目にされる宮参りなどをあげることができる。氏神の前で子供をわざと泣かせ、氏神に氏子として認知してもらうのである。以上のように、鳥翼の習俗は、その時期がいつであれ、子供が社会的に認知される前に行うものだという意図を明瞭に窺うことができる。

## II. 鳥霊信仰の系譜

社会的に認知される以前に死んだ子供を鳥、あるいは鳥のようなものと表現することは、そのまま素直に考えれば、そのような子供は死後に鳥に生まれ変わると考えられていたことになる。こうした考えは特殊なものか、と言えば、実はそうではない。その由来するところをある程度推定することができるのである。ここでは、弥生時代以降の鳥に対する信仰の歴史を振り返ることにしたい。

### (1) 鳥霊信仰の北方の流れ

考古学者・国分直一によれば、日本の基層文化に流れ込んでいる鳥霊信仰には三つの系譜があるという。

第一の流れは、アムールランドから、シベリア系の水人・ハンターによってもたらされたものである。北海道の石狩川河口に近い手宮・フゴッペ洞窟の岩壁には羽あるいは翼をつけた像が有角の像とともに描かれているが、これはシベリア系の鳥霊信仰の流れを汲むという<sup>7)</sup>。手宮・フゴッペ洞窟がシベリア系の鳥霊信仰の流れを汲とする見解の根拠となるのは、中部レナ川のペトログリフとして知られているスルクタク・ハヤ・マーキンスカヤ・ロックの岩壁画との共通性、すなわち登場する人物には有角の像が目立つが、頭上に羽飾をつけた像も含まれているという事実である<sup>8)</sup>。国分直一は、ペトログリフに描かれる羽をつけた人像を、シャマンとみなし、「東北の部族のシャマニズムでは、人間の霊は天に行くと思われがゆえに、シャマンは鳥装することになるであろう」と述べるとともに、有角の人像をトナカイ猟人の社会に属していることに由来するものと推定している<sup>9)</sup>。なお、フゴッペ洞窟が残された主体となる時期は、縄文時代の末期であり、その堆積層の上層には擦土土器の最古のタイプあるいは直前のタイプのものがあるが、その出現はいわゆるアイヌ文化が明瞭なかたちをとるようになる6世紀後半以降のことであるという<sup>10)</sup>。

第二の流れは、第一の流れと同じく北方系の流れを汲むものである。韓国大田槐亭洞出土の青銅儀器の一面には、樹枝に停る鳥が表現されており、他の一面には鳥の羽をつけた耕人が踏鋤を踏み込んでいる状景が描かれている。国分直一は、韓国の民俗学者・張籌根の見解<sup>11)</sup>、すなわちこの状景は、“霊鳥”信仰を表現するものであり、内陸シベリアー蒙古ー満州系の霊鳥信仰の南漸があったことを示すとともに、大阪府四池に発見された弥生時代の木製の鳥は、霊鳥信仰が稲作にともない日本に及んだものとする指摘を引用し、この考えを受け入れている<sup>12)</sup>。

この張籌根の見解に従えば、北方的なシャマニズムに基づく鳥霊信仰が朝鮮半島において稲作、およびその儀礼と結びついたりと考えられる。こうした指摘は、考古学の立場から設楽博己も行っており<sup>13)</sup>、鳥形木製品など鳥に対する信仰などは、遊牧あるいは穀物栽培を生業とする北方青銅器文化を育んだシャマニズムに求められ、それが朝鮮半島南部で水稻農耕文化と複合し、農耕儀礼に取り入れられたものとみなしている<sup>14)</sup>。なお、ここで言う鳥形の木製品とは、竿の先に鳥形木製品をつけて立てる、いわゆる鳥竿ー現在の朝鮮半島においても、蘇塗と呼ばれる立竿には鳥形の木製品が付けられるーのことであり、秋葉隆によれば、これは原始的な北方的シャマニズムの神杵に由来するものという<sup>15)</sup>。

### (2) 鳥霊信仰の南方の流れ

鳥霊信仰の第三の流れは、本稿に関連して最も重要である。それは南・東シナ海を通して、遅くとも弥生時代に登場した鳥霊信仰である。鳥取県淀江町の稲吉角田遺跡から出土した収骨に用いられた弥生時代中期の壺の頭部には、羽装の船人がロングボートを力漕している状景、高倉のある集落の一角に、巨樹の枝から『魏志』韓伝に記載されている鈴鼓に当たると推測されるものが垂下している状景、などを示す線刻画が描かれている。この線刻画から国分直一は、華南系のロングボートに羽装の人物ー羽人ーが乗っていることから、華南・江南系の水人の登場が考えられること、韓国の蘇塗の景観とみられるものが表現されていることから、華南・江南系水人は朝鮮半島の西南沿岸地方を経由し日本海に登場したことなどを想定している。そして、華南の羽人が葬送儀礼と関連すると考えられていることを踏まえれば、線刻画が収骨壺に描かれていることの意味ー送霊の船としての意味ーが理解できるとしている<sup>16)</sup>。この国分直一の想定は、稲作が中国沿岸部を北上し、

朝鮮半島西・南部を経由し、日本に流入した事実を踏まえてのものであることは、改めて述べるまでもないであろう。

羽装の人物と葬送儀礼の結びつきは、東南アジアの青銅器文化であるドンソン（東山）文化に特徴的な遺物である銅鼓上の図像に明瞭に表現されている。銅鼓上には、水鳥や蛙などのさまざまな動物とともに、鳥装の人物を乗せた鳥形の舟、それに床上で杵をついている光景などが描かれているが、松本信廣によれば、この図像は、葬儀における状景、それにともなう靈魂の飛揚をめざす鳥船を表わし、また、杵をつく光景は死者の魂を蘇生させるための招魂儀礼を表現するものであるという。そして、それに参加している鳥装の人物は、こうした目的を果たすために必要な呪術者であったとみなしている<sup>18)</sup>。

このドンソン文化は、起元前1,000年紀に繁栄しており、日本の弥生文化の形成に、直接的、間接的に大きな影響を及ぼした古代中国の地方文化である「越文化」<sup>19)</sup>とも深い関係にあったと考えられている文化である。ここに、葬送儀礼に関連する鳥装の人物が弥生中期の収骨壺に描かれることになる経緯を容易に理解することができよう。

鳥を葬送儀礼に関連づける考えは、古墳時代に入ると一層明瞭になる。弥生時代にもみられた鳥形木製品の使用は古墳時代にいたっても持続しており、5世紀半ば以降のものともみられる奈良県四條、黒田大塚、石見などの古墳周堀内から出土している鳥形木製品は、必ずしも使用方法は明瞭ではないものの、長い竿の先端につけて墳丘の周囲、あるいは墳丘上に立てられたものと考えられるという<sup>20)</sup>。

古墳時代に入ると、さらに水鳥を象ったとみられる埴輪や土製品が出土するようになる。4世紀末葉の大阪府津堂城山古墳では、周堀内に作られた方形の土壇上に、大型の三体が置かれており、また4世紀後葉の京都府蛭子山古墳から出土した鶏形土製品は、竿の先端に付けて立てられたものと推定されている<sup>21)</sup>。柳沢一男は、以上の古墳から発見される木製品や埴輪・土製品は死者の靈魂と鳥霊信仰の関係を示すものとみなしている<sup>22)</sup>。

ところで、古墳時代の5～7世紀に描かれた横穴式石室や横穴墓に描かれた壁画のなかには、弥生時代中期の鳥取県淀江町の角田遺跡の線刻画と、明らかに関係すると思われる図像が存在する。福岡県浮羽郡吉井町の珍敷塚や鳥船塚の壁画が代表的なものであり、いずれも Gondra 型の舟の船首や船尾に鳥が描かれ、その船上の空中には太陽が描写されている。淀江町の線刻画は一部破損しているものの、その船の上には太陽が描かれていたものと推定され、これらの線刻画や壁画の太陽は、先学がつとに指摘するように<sup>23)</sup>、死者のゆく太陽の国、あるいは太陽が昇り、また沈む方角にある死者の国を象徴するものと考えられる。こうした習俗は、現在に至るまで引き継がれており、響灘の蓋井島（下関市）では、盆に迎えた多くの死者の霊を巨大な鳥形の船に乗せて、太陽の沈む西の方角に流す、送霊行事が行われているという<sup>24)</sup>。民俗行事と呼ばれるものの持続力を理解すべきであろう。

葬送儀礼に鳥が関係していたことを示すのは何も図像などの遺物ばかりではない。記紀神話の天若日子<sup>25)</sup>の葬儀にも明瞭に表現されている。『日本書記』によれば、天若日子の死体を天上に運んで喪屋を作って殯をするとき、多くの鳥がさまざまな役割を果たすことが記されているのである<sup>26)</sup>。天若日子とは若い太陽神であり、その葬儀に鳥たちがさまざまな役割を担うというのも、先に述べた線刻画や古墳の壁画と重ね合わせると意味するところが理解できよう。松本信廣は、この記事から、当時の人々は、死後の靈魂が鳥になるという思想を持ち、鳥たちがその葬儀においてそれぞれの活躍して仲間としての役割を果たしたというような話を信じ易い素質を持っていたと認めてよいのではないかとし、鳥が手助けすることは靈魂の冥界に行く幫助になると考えられていたと推定している<sup>27)</sup>。人間の靈魂が死後、鳥に生まれ変わるとする考えのあったことは、ヤマトタケル伝

説を持ち出すまでもないであろう。

なお、鳥霊信仰の南方の流れのなかに、農耕祭儀と深くかかわるものも存在していることを指摘しておく必要はあろう。それは、鳥が地上に稲穂をもたらしたとする、いわゆる「穂落神」の伝承にみられるものである。鈴木満男によれば、古代越文化を担った人々の精神世界に刻印されていたのは、稲作社会の死活の問題である水を支配する霊の象徴としての蛇、そして稲種を人間界にもたらした「穂落神」としての鳥であったという<sup>29)</sup>。

### (3) 鳥翼の習俗の系譜

鳥が人間の靈魂の他界への導き手であったとしても、また靈魂そのものの化現であったとしても、これまで述べてきた鳥霊信仰の系譜を踏まえれば、幼くして死んだ子供を鳥翼にする習俗の持つ意味を、ある程度理解することはできよう。つまり、鳥翼の習俗は、いわゆる「天鳥船」の観念が、新たな習俗として“断片化”したと考えられるからである。

ところで、この鳥翼の習俗を考える上で、きわめて重要な手がかりになると思われるのは、『三国志』魏書弁辰伝の記述、すなわち、大鳥の羽根を用いて死者を送るが、それは死者を飛揚させたからである、とする記述である。現在の鳥翼の習俗においては、実際に、羽根を副えることはないが、この3世紀ころの弁辰の習俗には、“鳥翼”の習俗をただちに想起させるものがある。しかも、弁辰とは朝鮮半島南部に位置し、倭の習俗ときわめて類似している—「男女の習俗は倭に近く、また男女ともに文身している」—と同書に述べられているのである。さらに、慶北達城郡玄風で発見された墳墓から出土した舟型容器の後部に鳥の仮面をかぶった操舵手の像があり、古代の朝鮮半島南部にも「天鳥船」の観念があったことは明らかであるという<sup>30)</sup>。

こうしてみると、「天鳥船」の観念は、稲作とともに中国南部から沿岸部を北上し、朝鮮半島西・南部を經由し、日本に流入したが、一部は、鳥の羽根を用いて死者を送る習俗に簡略化したと考えられるのである<sup>30)</sup>。

## Ⅲ. 死者儀礼と天鳥船—「灰膳」の習俗

弁辰伝に記述される大鳥の羽根を副えて死者を飛揚させる習俗が、ただちに鳥翼の習俗を想起させるとしても、両者の間には若干の違いが存在しているように思われる。大鳥の羽根は、単に、靈魂を飛揚させるためのものであるのに対し、鳥翼の習俗では、子供が鳥そのものになると考えられている場合があるばかりか、鳥翼の習俗の分布地域と一部重複する地域に、人間は死後、鳥に生まれ変わると考えられていたことを明瞭に示す死者儀礼が存在しているからである。いくつかの事例を示そう。

①物部村別府 (M42.m) ・葬式の晩、金網で通した細かい灰を膳がみえないくらいうすすると、足のついた膳にまんべんなく入れ、箕の中に入れて、床の間に置く。膳のまわりには、果物、子供が最初に産湯を使うときに入れる初草(うぶくさ)、ハイバラなどを置く。洗濯だらいに水を入れ、竹(シノベ)で舟を作り、浮かべる。葬式に来ている誰が作っても良く、複数の舟のうち、誰の舟が最初に反対側にたどりつか競う。葬式の晩のうちに、膳の灰の上には、鳥や蛇や蝶の足跡がついている。そして、太夫がみて「鳥になった」「蛇になった」などと占う。その跡は、最初に着いた舟に乗って来て膳に上がってきたものである。(871120)

②物部村津々呂 (S14.f) ・葬式の翌晩、膳にふるいをかけた灰をまんべんなく入れ、たらいのなかに水を少し入れ、竹を十文字に組んだ上に膳を置く。仏さんが乗る笹舟を作ってたらいに流す。たらいのまわり

に竹でやぐらを組み、電灯が当たらないように箕を立てかける。49個の餅を供えたりしているおよそ2～3時間のあいだ仏壇の前に置いておく。その後見ると、鳥（V字形）、蛇（波形）、蝶などの跡が出ている。「鳥になった」などと判断する。本当の仏さんになった人はお釈迦さんの跡がでるが稀である。跡は、ほとんどの人が出るが、本当の仏さんになる新盆までは、跡がついた動物を大切にす。現在でも行っている。(871121)

⑩徳島県西祖谷村（T8.F）・死後6日目の晩（オムイカ）に、死者の寝ていた部屋の窓際か戸口に灰かお米を入れた膳を置く。7日目の朝、鳥（にわとり）の足跡がついているという。実際にはついていないだろうが、小さい頃からそのように言うのを聞いている。死者が「鳥になって出ていった」と言う。(870805)

⑪徳島県西祖谷村善徳（M45.m）・オムイカの晩（ここでは何日目とは決まっていない）に、亡くなった人が使っていたお膳に灰を入れ、その上にカヤやヨモギを添え、死者の寝ていたところに置く。翌朝、鳥やねずみの跡がついている。跡のついた動物に生まれ変わるという。ヨモギやカヤを添えるのは、死者が「カヤやヨモギの野原になったのでここにはおれん」と言って去るようにするためである。(870806)

ここでは、この死者儀礼を、灰を膳に入れて何に生まれ変わったか占うことから、便宜的に「灰膳」の習俗と呼んでおくことにしたい。この灰膳の習俗は何に生まれ変わったか占うばかりではなく、事例⑩が示すように、死者が二度と戻って来ないようにするための絶縁儀礼としての性格も持つものである。事例⑪で、膳のまわりにハイバラを置くのも同じ趣旨によるものであろう。

事例⑩では、新盆（初盆）が過ぎ、“本当の仏”になるまでの暫定的な生まれ変わりであるとしているが、他の多くの事例が示すように、死後の“永続的な”生まれ変わりを占うというのが本来の姿であろう。死後、動物に生まれ変わるのが奇妙に思われるようになるに及んで、民間仏教との間に妥協点を見出し、合理的に解釈した結果生みだされた考えであるように思われる。

この死者儀礼で、注目すべき点は二つある。

第一に、生まれ変わると考えられている動物はさまざまであり、掲げた事例以外にも、うさぎ、牛、馬、猫、トンボ、蝉、ムカデなどと言う場合もあるが、ほぼすべての事例に登場するのは鳥であり、次いで多いのは蛇であるということである。これまでみてきたような鳥霊信仰の歴史を踏まえるならば、こうした伝承は決して恣意的に発生したものでないことは明らかである。蛇が多いというのも、すでに別稿で論じたように<sup>30</sup>、日本において自分たちの祖先を蛇とみなす蛇トータムの観念が存在したことを考慮すれば理解することができよう。死者は、また蛇に生まれ変わり、祖先となるのである。

第二に、事例⑩、⑪が示すように、盥に水を張り、笹舟を浮かべる儀礼的行為を行うことである。そして、その舟には生まれ変わった動物—多くは鳥—が乗っているのである。ところで、舟は、象徴的に、どこからどこへ向かっているのだろうか。事例⑩では、舟に乗ってきた死者が、すでに自分の住んでいた場所が、ハイバラが生えるような人間の住むべき場所ではないことを悟り、帰ってゆくのである。その限りでは、どこかよそから自分の家に戻って来ている、ということになる。しかし、ここで問題となるのは、こうした絶縁儀礼は、ムイカガリ、あるいはオムイカという儀礼名称が示すように、死後6日目に行われるのが一般的な形態であり、盥に水を張り、舟を浮かべる儀礼とは必ずしも結びついていなかった、と考えられるのである。したがって、儀礼的脈絡から考える限り、この舟は、やはりこの世から他界へと旅立つことを象徴しているように思われる<sup>30</sup>。

そのように考えることが許されるならば、この世から他界へと向かう舟、それに乗っているのは、鳥に生まれ変わった死者、という点で、盥のなかという小さな世界で行われる出来事は、「天鳥船」の観念の儀礼化そのものと言えるのではなからうか。ここでは鳥は、死者の靈魂を他界へと送る呪術者ではなく、死者の靈魂そのものである。

こうしてみると、高知県の死者儀礼においては、「天鳥船」の観念の反映とみられる儀礼が存在しており、それが幼児葬法に簡略化—というよりも言葉の上だけのことなのだが—してみられるとしても何の不思議もないであろう。したがって、弁辰の習俗と鳥翼の習俗の間に、直接的な系譜関係を想定できるかどうかについては、その可能性を捨て切れないとしても、一方では単に靈魂を飛揚するために羽根が用いられると述べられているのに対し、他方では靈魂そのものが鳥になると考えられている場合のあること、また、鳥翼の習俗は、弁辰の習俗との直接的な系譜関係を想定しなくとも独自に発生しえたと考えられること、などの点で否定的にならざるを得ないのである。

ちなみに、鳥翼の習俗は、高知県の東～中央部に分布の中心があると推定されるのに対し、灰膳の習俗は、現在把握できる限りでは、西南日本に分布の中心があり、それぞれの発生が独立していたと考えられることを付け加えておきたい。

以上の議論が正しいとしても、ひとつの重要な問題が残されることになる。それは、なぜ、幼児葬法という特殊葬法のなかに鳥霊信仰に基づく葬法がみられるのか、という点である。この問いに対しては、民間仏教が浸透する過程で、鳥翼の習俗は片隅に追いやられ、幼児葬法という特殊葬法のなかに残存することになった、とする想定を掲げておきたい<sup>33)</sup>。

### 結び

本稿では、幼児が死んだ時に、その幼児を葬ることを「鳥翼にする」などと、鳥に関連づけて表現するのはなぜか、という問いに一定の解答を与えるべく努めてきた。その結果、いくつかの仮説的な見通しを含んでいるとは言え、弥生時代以降持続してきた鳥霊信仰、ことに「天鳥船」の観念の系譜を引き、それが新たな地域的展開を遂げたものとの見通しを得た。また、死者の靈魂は、鳥に化現するという考えが、現在に至るまで存在していること、鳥翼の習俗とは別に、「天鳥船」の観念を儀礼化したと推定される死者儀礼が存在していること、などの点も指摘した。

弥生時代以降の鳥霊信仰は、さまざまな地域的展開を遂げて存在し続けており、それは高知県のみならず、全国にみられる。たとえば、さきに掲げた響灘の蓋井島で盆に迎えた祖霊を大きな鳥形の船で日の沈む西に送る習俗、九州の阿蘇山麓の新しい墓標に鳥形を置く習俗、山陰・日本海沿岸で棺蓋の四方に鳥形をのせる習俗、対馬のスヤという墓上施設に鳥形を飾る習俗など、<sup>34)</sup> 数多くの事例をあげることができる。高知県の鳥翼の習俗や灰膳の習俗もまた、それら地域的发展形態のひとつの類型とみなせるのである。

### 註

- 1) M43.mとは、インフォーマントが明治43年生まれ男性 (male) であることを示す。Tは大正、Sは昭和、fは女性 (female)。
- 2) 881006とは、1988年10月06日に調査を行ったことを示す。
- 3) 民間宗教者。
- 4) 七人ミサキとは、この世に未練や怨みを抱いて死んだ悪霊であり、人間の周囲にいて死や病気をもたらすと考えられている。七人の人間を道連れにしなければ、自分は転世できないため、七人ミサキと呼ばれる。
- 5) 冠婚葬祭にともなう行われる贈与交換に用いられる専用の袋。たとえば、祝儀の際に米1升を贈与するときにこの袋を用いる。オトミ袋とも呼ぶ。
- 6) 宇野しのぶ (1992)、「高知県における初誕生儀礼の意味」『日本民俗学』191号、150頁。
- 7) 国分直一 (1992 a)、『日本文化の古層』第一書房、143頁。
- 8) 国分直一 (1992 b)、『北の道 南の道』第一書房、27頁。



- 9) 国分前掲8)、30頁。
- 10) 国分前掲8)、23頁。
- 11) 1972年3月16日付『韓国中央日報』記事。(筆者未見)
- 12) 国分前掲7)、143頁。
- 13) 設楽博己(1991)、「弥生時代の農耕儀礼」『季刊考古学』37、63頁。
- 14) これに対し、考古学の金岡恕は、「鳥霊信仰はおそらく水稲耕作文化と共に胚胎し中国沿岸から朝鮮半島を経て古の倭国にも伝来したものであろう」とする想定を掲げている。金岡恕(1995)、「鳥装の羽人」『九州歴史』59号、9頁。
- 15) 秋葉隆(1954)、『朝鮮民俗誌』名著出版、235頁。
- 16) 国分前掲7)、143～144頁。
- 17) 鳥取県淀江町稲吉角田遺跡の収骨壺に描かれる線刻画を葬送とは無縁とみる見解がある。春成秀爾は、奈良県唐古遺跡などの凶像も踏まえて、鳥装の司祭者は、サギが象徴する稲霊を祭る人としての性格を持つとみなしている。春成秀爾(1995)、「鳥になった司祭者」『九州歴史』39号、16～17頁。
- 18) 松本信廣(1964)、「古代日本と南方との関係」『国文学解釈と鑑賞』29巻9号、162頁。
- 19) W. エーバハルトによれば、「越文化」とは、「タイ文化」(河谷居住稲作民)と「ヤオ文化」(山地居住焼畑耕作民文化)が、中国東南部で相互浸透することによって形成された複層の文化であり、紀元前1,000年紀中期頃にはすでに円熟期に入っていたという。W. エーバハルト(1987)、『古代中国の地方文化』(白鳥芳郎監訳)六興出版、375頁。
- 20) 柳沢一男(1995)、「古墳時代の鳥霊信仰と他界への導き」『九州歴史』39号、11頁。
- 21) 柳沢前掲20)、11～12頁。
- 22) 柳沢前掲20)、12頁。
- 23) 国分前掲7)、175頁。大林太良(1977)、『葬制の起源』角川書店、201頁。
- 24) 国分前掲7)、175頁。
- 25) 国譲り神話において、天若日子は豊葦原瑞穂国を天照の支配下に置くために地上に送られた使者であったが、命令に従わず天上から放たれた矢に当たって死に至るとされる。
- 26) 川雁は食物を入れた容器をもつ者、そびは死者に代わって物を食う人、雀は米をつく女、ささぎは泣女、鶉は死者に着せる衣服をつくる人、鳥は料理人などとされる。なお、天皇の陵の墓穴を掘る人夫のことを八咫鳥と呼んだのも、鳥が葬列に加わることが必要であるという観念と無関係ではないという。大林前掲23)、202頁。
- 27) 松本信廣(1966)、『日本の神話』78頁。
- 28) 鈴木満男(1991)、「棚機つ女の爪紅—環東シナ海の古代祭儀」『日中文化研究』2号、61頁。
- 29) 大林前掲23)、202頁。
- 30) 弁辰の習俗が鳥翼の習俗に結びつくとするならば、ここに至って北アジアのシャマニズムの問題が視野に入ってくることになる。北アジアのシャマニズムにおいては、シャマンは鳥の装束をまとい、鳥に変身して鳥の言葉で霊的交流を行い、鳥形霊と自由に天上界や冥界に飛翔しようと信じられていたばかりか、彼らの間では、誕生前の魂は雛の姿をしているが、死者の魂は鳥をその容器とすると考えられ、シャマンは鳥形を作ってそのなかに自分の魂を吹き込んだりすることも行った。したがって、アルタイ系の諸民族の祭場や墓地には鳥杆が立てられ、棺には鳥形が副えられたという。ここでは、シャマンに限定されるなどの点で、いくつかの問題がないわけではないが、弁辰の習俗の成立に北アジアのシャマニズムの影響も考慮する必要があるかも知れない。平林章仁(1992)、『鹿と鳥の文化史』白水社、122頁、など参照。
- 31) 吉成直樹(1995)、『マレピトの文化史』第一書房、131～140頁。
- 32) こうした盟に舟を浮かべる死者儀礼は、現在のところ物部村以外では確認しておらず、断定的な結論を下すためには、より広範な調査が必要であろう。それにしても、物部村という山間地域で舟葬を思わせる事例が存在することはきわめて興味深い。
- 33) この想定とともに、古代の鳥霊信仰は葬送儀礼に関連するばかりではなく、出産儀礼にも結びつくとする角度からの検討が必要かも知れない。たとえば、『古事記』のウガヤフキアエズノミコトの出産の場面は、新生児に新しい霊魂を運んでくると信じられた鳥(鶉)の羽根で産屋の屋根を飾る呪術と、その鳥(霊魂)を招き入れるために産屋の屋根の一部を葺き残して置く習俗を神話的に表現したものであるという。平林

前掲30)、124頁。

34) 平林前掲30)、125頁。

平成7年9月28日受理

平成7年12月25日発行